

【完堕ち秘書】「君は僕のモノだ」冷徹エリートの甘い救済 ～首輪を嵌められ逃げられないペット生活～

サンプル（一部抜粋）

「実はね...一つだけ空きがあってね。僕の秘書の粹だけ。」

「君に勤まるかどうか、確認させてもらおうと思ったんだよ」

「（くすっと笑う）君、崖っぷちなんだってね。
他の企業全て落ちたんだろう？」

「...じゃあ...脱いで。
君、なんでもやるって言っただろ？」

「これは救済だ。
この業界から不必要の烙印を押された君を、僕の手で、僕のすぐ傍で
飼いならして可愛がってあげようかって提案をしているだけだ」

「...頬が赤くなってる。
そんな潤んだ目で僕を見て...まるで抱いてもらうのを待ってるように見えるな。」

「...口では否定しているが...」

（ブラのホックを外す）

「...じゃあどうして、もうこんなに乳首が立っているのかな？」

「また否定か。
僕は言っただろう？
僕に従順な人間がほしいと。」

「...いきなりはだめ？こんなに濡らしてるくせに、よくそんなセリフが吐けるね。」

「...面接の回答はあんなに型通りでつまらなかったのに...
ここの反応は、ずいぶん個性的で情熱的だな」

（カチャッとチョーカーを装着する音）

「...僕のモノだって印。」

「...中、グチュグチュだね。
どっちも気持ちよさそうだけど...正解はこっちだな」

「...ここ。好きなんだ？
じゃあイってもイっても、ここ、虐めてあげる」